

より、女を罵る稱になつたのであらう。或は糞尿であつて、糞垂れ小便、垂れの意より女を罵る稱になつたものか。「ふんばり」は「ふんばり」といふ、蓋し「ふんばり」の「ん」が未嘗の「り」に引かれて「ふんばり」で転訛したので、「が」には「り」がりは「り」といへる類である。俳言集に「江戸に一賤しき妓女を罵りてふんば女と言」とあれども、紅白源氏物語などにもこの語の見えてゐるから、京阪地方でもかなり古くから用ゐた語である。

ふんぶくちやがま (堀田川)

〔又福茶番〕上野園館林の茂林寺の僧守鶴の持つた釜で、一度水をませば五日間ふんぶくちやがまといふ。俳言集に「本朝俗談志に、上野園館林茂林寺に理の化せし守鶴といふ僧、住職七代の間納所せし釜を調せしことを記して曰く、此釜を菴寮の圍爐裏にかけ置き、一度水をませば五日がほど涌出で、水をまき事なし常にふんぶくちやがまといふ。守鶴生をあらはしければ、此釜のぬしは毛が生たりと人々いひあへり。」

ふんや (大綱巻)

〔又福〕岡本文彌が語り創めた哀婉な調の淨瑠璃節。聲曲類纂に、「大阪岡本文彌。山本土佐孫が門人と云、天和貞享の頃にや、伊藤出羽孫が芝居に於て一流を語り弘めしかば、文彌節と號して浪花中にもてはやしぬ。」

ふんばり

源の貞世入道了俊は、往時應安年中に鎮西の探題に補せられ、菊池が餘族をへいきんし武功

ふんぶくちやがま——べりかひの冠

他に越え(今川了俊) 日本武尊と稱し奉り、九州既に平きんの由帝都に注進ありしより(日本武尊)。この男子唐土に押渡り、大明縫製を平均し異國本朝に名を揚げし(國性範)平均平定。どなたも船中平ぐわい御免、よいお近付もとめしと禮儀仕舞(ば) (博多)

へいごわい

〔平櫛撞ならいで平氣なこと。無邊感。鑿頭屋本節用集及び易林本節用集に「平櫛」と訓釋に入、へいごわい。三代實錄に尋常平櫛之時天人眼目に平櫛屑と見えたり、敬意なき意にいふも通へり。〕

へいぢもん

〔屏中門〕表門と母屋との間にある門。中門。〔最明寺殿〕

へいれい

〔平〕應用明天皇職人鑑職人垂しの條に、「縁に心を揉肩帽子、へいらひ小結製子打や」とあり、「へいらひは「へいらひ」ともいひ、また「ひれ」ともいふ。「ひれ」を見よ。

へうたんにい

〔飄飄紙〕飄飄の形した紙書。元祿寶永頃流行した紙書にはかかる形物の物が多かつた。序云、飄と筆とは別物で、飄はひさご、筆は竹のくみ籠で食物を入れる物であるが、朗詠集に「飄筆揮空と見えたるより合せ呼んで飄のことをいふやうになつたといふ。〕

の、べうの湯元はあれとかや(二枚繪草紙)(用明天皇) 犬の吠聲(べう)に「べう(別府)をいひかけて、「べうの湯元」というたのである。犬の吠える聲を「べう」といふ例は、狂言記犬山伏などの中にも見えてゐる。別府は豊後國速見郡にある有名な温泉地。

べうもく ますらば其儘べうもくとなり(用明天皇) 〔砂目〕すがめ。隻眼。

べかこ 千兩道具の娘を二十兩の目くさり金で女房に持たうとや、べかこまなるまい(女腹切) 手なたたいはつほらほ、ちちや知らぬ、あべかこの新介と、走つて内(駈込めば)(露門松) 〔目赤く〕を普便によつて轉じてめかかると「あかんべい」といふ。小兒が下腹を指で引下げ、裏の赤いを見せるといふ語。小兒ならずとも承諾の意にいふ。大鏡に「めかかちつちごをおどせば」露門松に「あべかこの新介」とある。〔餅〕は感動詞である。そして東海道の名物に「安倍川(の)梅餅」といふがあるから、それをもちつて新介と人名にしてつづけたのである。園花萬葉記卷八、駿河國中名物出所之部に「餅」あべ川の茶屋にて往來の旅人に賣る也。風味海道の名物」と見えてゐる。

へきしよ 御年寄衆、御小姓の外、召もなきには御座の前参らぬ答の御壁書(加増増法) 〔露書〕露紙にて法合。壁書はもとかべがきの錢である。太平廣記謝自然傳に、「二天神衛其門扉、如露壁書」

へきり 間のへきりを小楯にて時分

を鏡へ、サア来いと(博多) 〔部切〕船内を仕切つた。和漢船用集卷五に「部切舟」をいふるに機間も仕切あるの名なり、此ゆゑに明船とも云し見えてゐる。部切の義こゆるで問かである。

べくのみ 押へぬ盃飲まぬ毒、下に置かすのべく飲みや、浦島飲みはあけること法度にしての潮干飲み(加増増法) 〔可飲可〕の字を動物詞に用ゐる時に漢文では可致可被下などと書いて、上に置くに於て、注いだ酒盃は下に置かずに直に飲むと云ふ洒落言葉である。またこの要求に應じて作つた可盃といふもあつた。爲井董章(寶永二年刊)に、可盃を畫きて「丁形、時時形本形」に、可盃を畫きて「丁形、下に置かぬといふ心にて可といふ也」と見え、醒睡笑に「べく盃を戯れに夏菊、名づけてこそ候へ、その故は猫(といひか)に置かれぬば」と見え、また嬉遊笑巻十上に雅齋狂集を引いて、「盃の底に細き穴をあけて、指を以てその穴を塞ぎて酒を盛らしむ、仍て飲させば下に置かれぬ字ゆゑ、可に可杯と名付け用ひ」と見え、西鶴俗つれ巻一にも「可さかづきの後皆氣つくなりて、男達の咄に云々」と見えてゐる。

へこむ 中の榮耀遣ひか(重井簡) 〔目〕失敗して損をする。和訓栞に「へこむ。俗語なり、強羅の義也。棋林子のこの文」食つかつと韻脚を合せた文節である。

へつかつの冠 阿克將が、出立は纏網の赤装束、へつかつ(の)冠着たり(國性範後日) 〔へつかつ〕は靴鞆の誤用であらう。昔靴鞆と

郡したものは清の興起した満洲の祖先と同人種であるから、清の部將阿克將も鞆部族として、「鞆の清」といふべきを「べっかつつ」と誤用したので、冬爾帽のことであらう(序云、江戸時代は鞆も鞆部も鞆と同じものと解してゐた。「だつたんの條を参照」)

べっかん 菓子に取つては糖菓、羊羹、かすてら、ほろこ(天神記)

【鹽菓】菓子の名。嬉遊笑覽卷十、飲食の部に、「安齋云、鹽菓は摺立ての山の芋一升に砂糖一片、赤小豆のこし粉一升、小麦粉五勺なり合せ、蒸して龜甲形に切るなり」

べつきやうさんぶ 汝が家の眞言秘密、三密瑜伽の阿字金胎も別經三部の外を出でず(本領曾我)

【別經三部】眞言宗根本經典の三部、即ち大日經(全七卷)、金剛頂經(全三卷)、蘇悉地經(全三卷)を云ふ。

べつじのねんぶつ ばん様呼びまし越後町の扇がもとにて一夜別時の念佛申し候(三世相)

【別時念佛】別時念佛會の略。多く淨土宗寺院にて修する法會であつて、同僧の僧俗相會し、一定の時日内(二七日・三七日、或は九十日等)専ら唱名念佛を修するを云ふ。

* べっかん 僅か二百日三百日のへり銀(冥途飛脚)

【例】へぎとる。削り取る。日本紀に「所折をへつる」と訓んである。「へつり銀」とは、はつた銀。

* へんべん とてもものごとへへんべんで、祖母がほほに抱かんと(實古教信)

河内屋の與兵衛様と二人帯解いて、へんべんも脱いでいざんする(安藝)

猿のべへ借つて着しよ(千正犬) 衣服をちふ小兒語。蓋し着物はべらべらなるもの故。その頭の音「べ」を離らし語である。小兒語に聞して「ばとど」條に述べて置いた。「猿のべへ云々」は「あまさぶささぶ云云」をも見よ。

べのこ 我が君を一突とはべべの子のあべかこう、天角地目天罰自滅、牛の最期は立ち所(開八州)

牛の子をいふ。蓋し母牛にべらべら歩いて歩くべらべらくの頭音を離した語であらう。物類稱呼卷二に「體を四圍にてべべの子とみる所がある。果林子のこの文は、幼兒のするあかべに、牛をいへる縁でべべのこと云ひかけたのである。これを「べらべ」としした本があるが、そは字形の相似より「べのこ」を誤つたのである。

* へやずみ 私は御存知の如く部屋住のことなれば思ふに甲斐な(傾城佛屋)

【部屋住】次三男で家督を相續せぬ部屋住の者。

べらのこ 「べらのこ」を見よ。

* べりたり やれお盃持つて来いと、たつた獨りでべり立(る)(女校)

「しやべりたつ」(饒舌)の約。えらえらしやべる。

* へりぬり 亂舞舞つて見せんとてへりぬり取つて打被き(本領曾我)

【縁邊】縁邊烏帽子の略。烏帽子の縁をよくらかに中に心を入れて漆塗にしたもの。類聚名物考に「これは烏帽子のまはりのへりを漆塗にしたるなり、近頃見れば、常の烏帽子の縁は平きを、これはちとよくらかに蛤はの如く

にして中へしんを入れて塗りたるもの也、これ必ずしも古への製にてもあるまじきなれども、かかる事なるべしと思ふに今の烏帽子折の工の作れるものなるべし、その縁には綴を入て武飾に用るなりいふも、後世の推量より出たる漆塗にせし事は近き世のわざにて云云。

へを (基察太平記)

【癩】鳥にへをを見よ。

へんがいつさいしよ 「びるしやなを見よ。

* へんがいつさいしよ 親仁、隠居様へ任せて在所はへんがいつさいしたがよい(今宮) わらはが事は今の間にいへんがいつさいにあはうもの(根元曾我)

【變改】變じ改めること。下學集・言辭門に、「變改」。女殺曲地獄下巻に、「女郎はそれ程客に厄介をへんがへに行く客もあり」とある。「へんが」に變替の字を當てれど、蓋し「へんが」の説であらう。

* へんがらじま 憂きくる孺子の糸の切れざる辨柄綿の、愚痴なこらさらきおりのべんがらじまを見よ。

* へんげ 變化と取違へ行房に登せられたり(彌田川)

【變化】動物が形を怪しく異形に變へること。化物。妖怪。

* へんごう まばゆからぬ張臂へん(こら) (齋藤山)

【齋口】齋舌。後漢書・曹世叔妻傳に「婦言不必修口辭也」。

* へんさん もとの左兵衛の尉勝頼その爲の烏帽子狩衣と偏衫脱棄

て(娥)

【偏衫】袈裟の一種。左肩から右袂に懸ける僧尼の上服。書言字考節用集・明宣帝に「偏衫。僧尼の上服、事見二僧史略」。

* へんしふ さては何者ぞ偏執を起し害せしぞ(出世景清) 橋の諸任我君に將軍を超えられ偏執の上、多年所望の御太刀當家に渡り無念とは思へども(絶勢)

【偏執】かたがちな執念。怨怒。西漢與志撰風流御前二代曾我(實永六年刊)一巻に、「殊に其方病體聊心得ず、察する所何奴かへんしふかに二つが、さるなれば生贖付てなやますか、二つに一つは外れまじ」

へんじやく 梅座頭を振つて者婆・扁鵲でも叶はぬ(夕霧)

【扁鵲】姓は秦、名は越人、支那春秋時代の名醫である。詳しくは史記・扁鵲倉公傳を見よ。

へんつき 雙六の采の目の心に合はぬもれたましく、へんつきはむつかし(娥)

【偏突】漢字の偏を離して、旁ばかり見せて何偏とあてる遊戲である。旁を離して偏をもつて何とらふ字だあてるのだと云ふ。源氏物語裏巻に、「甚うちへんつきなどし給ひつづ」。枕草紙(卷四)に「さしつどひてへんをぞつく」。

へんねち 追従面の出入の奴か、支言か偏れちか(兼好)

【偏】の義。但言集覽に「へんねち、偏にちる也」。

* へんべん 三郎が盃を舞殿にへんべんとぞ申しける(小栗判官)

【返辨】返却辨償。返すこと。